NARUTO転生モノ。

不思議の国のミク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＮＡＲＵＴＯ転生モノ。

【Ｎコード】
Ｎ７５３３Ｚ

【作者名】
不思議の国のミク

【あらすじ】
ツバサ転生モノ。の主人公アリスさんが、ＮＡＲＵＴＯにいったら。という妄想小説です。
といっても、プロローグからすべてやり直しますが。容姿、能力などは、次元移動と、運などは変わりますが、後は変わりません。
ツバサと同じように駄文になると思いますが、おねがいします。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

プロローグ

「う・・・ん・・・？」

目覚めるといつもとは全く違う場所。

目の前には幼女さんがいる・・・。

まあ、それはどうでもいいとし「どうでもいくないですよ！」て、とりあえず、夢だか「無視ですか！？無視するんですか！？」らもう寝てしまいましょう。

「おねがいします！！反応してください！！もうないちゃいますよ！？」

えーっと、あ、床がちょっと固いですが、寝れますね。よし寝ましょ「本当にお願いします！！反応してください！！反応してくれなかったらもう本当にないちゃいますよ！！」

「あーーもう！うるさいです。せっかく寝ようとしていたのに、なにしてくれちゃってるんですか。」

「私！？私が悪いんですか！？」

「あたりまえじゃないですか。いいから寝かせてくださいよ。」

「いや、おねがいします！本当に！話だけでも聞いてください！」

・・・しかたないなあ。

「で、話はなんですか。」

「ようやく聞く気になってくれましたか・・・それでは話ます。あなたは私のせいでしんでしま・・・「よし。寝よう。」いえ！！本当なんです！寝る準備しないでください！！」

ここに生きているじゃないですか。いい加減にしてくださいよ。

「いえ、あなたは私のせいでしんでしまいました。」

「一応信じて見ることにします。で、あなたは誰なんですか。」

「私ですか？フッフッフッ。聞いて驚いてください！わたしはか「よし。寝よう、うん。」あああっすみませんっ！！すみません！！もうふざけないので聞いてくださいいいいいっ」

「もう一度聞きます。あなたは誰ですか。」

「私は神です。」

「頭が逝かれていますか。大丈夫です。私の近くにある精神科のお医者さんはとてもやさしい方なのでやさしくしてくれま「お願いします！！本当にお願いします！！話を聞いてください！！話を聞いてくれないと神の座から天使に下ろされてしまうんです！！」・・・はあ、分かりました。少しの間しゃべらないので、その間にはなしてください」

「ふう・・・では、もう一度いいます。私は神です。でも、まだまだ新米なので、仕事にあまり慣れていませんでした。なので、この

前に、机の上の書類を床にぶちまけてしまって・・・で、書類を取っていたら、運悪く書類を踏みやぶいてしまいました。その紙があなたのことが書かれている紙だった・・・というわけです。」

「ふうん。一応信じることにします」

「有難うございます。それで、あなたを殺してしまったお詫びというわけで、転生&チート能力を渡そう、とおもったので、呼び出させていただきました」

「そうですか。わかりました。因みにもとの世界には「できないです・・・すみません」なんで？」

「死者が元の世界に戻るためには、一度善行を行っていた方は、天国に。悪い事をしていた方は、地獄に。ということになっています。そこで、5年間天国では、魂を休めます。地獄では、分かると思いますが、今まで行った罪を地獄で苦しんできます。ですが、軽い罪だと、半年くらいで天国にいけます。ですが、普通の寿命よりも早く死んでしまった場合、元の世界にもどれなくなってしまうんです。天国にも、地獄にもいけないので・・・」

「ふうん。それじゃあどこにいくのですか」

「はい。あなたには、この中のどれか1つをえらんでいただきます。」

そういって紙がだされた。

えっと・・・

魔術と科学がある世界。

ある学園での世界。

心を使って銃を撃つ世界。

忍者がいる世界。

魔法少女がいる世界。

えっと。

多分、１はとある魔術の世界ですよね。
２は・・・予想がつきませんが、平和な世界のようです。
３は多分テガミバチですね。
４は忍者ですからＮＡＲＵＴＯですね。
５は・・・リリカルなのはか、まどかの世界でしょうか。

１は上条さんの不幸が悪化しそうなので、却下。
２はチート能力くれるのに、まず平和ということで却下。
３は下手したら心とかなくしそうなので却下。
４は結構刺激があって面白そうで、ナルトにもあってみたいし。候補
５は魔法少女とか興味ないので却下。

となると４番ですね。

「４番でお願いします」

「わかりました。それでは能力を5つだけいってください。殺しちゃったの私ですし。
少々無理なものでもかなえます」

「それでは・・・
１つ目はテガミバチのマカの能力（髪の毛を剣に変える・身体能力）ですね。
２つ目はとある魔術の禁書目録の超能力全般、
レベル5で使えるようにしてほしいです。
３つ目は、やっぱりチャクラを九尾の１０倍くらいで、
超能力をチャクラで代用するようにお願いします。
４つ目はうちは一族に生まれるようにしてお願いします。
でも、万華鏡車輪眼は、５歳のときに開眼するようにお願いします。
５つ目はやっぱり、原作加入できるようにお願いします。
後は・・・ないですね」

「チャクラ九尾の１０倍って・・・結構きつい事いいますね。でも。
不可能ではないのでがんばってみます。」

パチンッ

神様が指パッチンするとパソコンが出てきました。

「（カタカタカタカタ）・・・よしっ。なんとかできました。それ
では、第２の人生をお楽しみください。」

すると、目の前が暗くなってきた。

「あ。神様。私のわがままきいてくれてありが・・・と・・・・・

う」

そのまま意識を失った。

プロローグ（後書き）

プロローグです。

誤字脱字があればお願いします。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

主人公設定

主人公設定

名前　うちは　アリス

容姿　テガミバチのニッチよりも3?低い。
髪の毛は茶髪、目は金色、手は普通。

体重　聞いたってほぼ意味がないほど軽い。
敵に軽く投げられただけで2?飛ぶ。

性格　自分からは攻撃しない。でも相手が攻撃したら
攻撃を開始する。はっきり言って冷血

能力　とある魔術の禁書目録の超能力を
すべてＬｖ５で使える
テガミバチのマカの能力身体能力は修行して、
３倍になっている。
チャクラが九尾の５倍となっている。

とりあえず今はこうなっています。

話が増えていくごとに、多くなると思います。

主人公設定（後書き）

誤字脱字など報告お願いします。

1話　アリスの誕生？（前書き）

1話です。

1話　アリスの誕生？

こんにちは、アリスです。

生まれて間もないころに捨てられました。

なぜでしょう。

それは、自分のチャクラが膨大にあったから。

チャクラが多いのがだめでしたね・・・・

そしてマダラさんに拾われました。

まさかの暁に入りましたよ。

原作加入したいといってもこういう形で入りたくはなかったですね・・・。

まあ、別にいいですが。

ゼツさんからいうと、木の葉に入って九尾の監視をして、報告する、だそうです。

まあ、こういう立場もいいかもしれませんね。

暁の中で、５年たった後に、万華鏡写輪眼が開眼しました。

マダラさんとかペインさんとかに驚かれましたね。

まあ、暁の本部に住むわけにはいかないので今実際一人暮らしをしていますからね。

６歳になったときにイタチさんが暁に入ってきました。

イタチさんに驚かれたけど、「サスケを頼む」っていってきましたし。

サスケさんも監視して、イタチさんに報告しています。

ちなみに今アカデミーで授業している途中です。

マカの能力のせいか、記憶力がいいらしいですね。

テガミバチのニッチも２００年以上前のこと、覚えてるって言いますし。

まあそこら辺はおいといて、

いまナルトさんがいるか先生に怒られていますね。

火影の顔岩に落書きをしたとか・・・

ちなみに成績は中くらいでとどめています。

たまに１度で成功したり。などですね。

修行するときは結界はっています。

理由は簡単です。そのときに報告とかしたり、普通の修行法（といってもガイ先生でも全くできないくらいハードな修行）など、あまり見られたくないですからね。

超能力とか、マカの能力で、剣にしたり、武器作ったりなど。

みられたら、火影さんに聞かれそうですし。

あ、ナルトさんがイルカ先生に口答えして、変化の術のテストをすることになりました。

まあ、楽勝なので、一発合格にしときますか。

あ、ナルトさんの番ですね。

「変化！！」

ボンッ

「イルカせんせぇ～」

とかいいながらウィンク。

はっきり言って気持ち悪いですね。

あ、イルカ先生が鼻血だしてたおれました。

「バカモノ！！変な術作ってないで、術の練習でもしてろ！！」

あー、怒られてますねー。

まあ、関係ないですが。

あ、次私ですね。

「変化」

ボンッ

普通に火影さんに似てるように変化しました。

「よし、いいぞ」

うん。疑われていないですね。

そうやってどんどん次にいってって、終わりました。

あ、今日の授業おわりました。

もう帰りましょうか。

ん？サスケさん？

サスケさんなら結構うまいくらいで終わらせましたね。

はっきり言ってサスケさん。迷惑なことしてますからね。

先生がこの術しますよー、とかいってお手本見せてる途中で、やってともいってないのにやって、成功させてますからね。

先生からにらまれてますよー。

ちなみにナルトは、サスケのマネして、失敗しておわりましたね。

ナルトはチャクラの練り方が駄目だから、失敗するだけですからね。

こんど教えましょうか？

いや・・・だめですね。

あまり原作を壊したくないので、Ｃランク任務のときにやることにしますか。

そうしたら中忍試験の時にあまり負担がかかりませんしね。

個人的にはイタチさん死んでほしくないので、とりあえずサスケが大蛇丸に呪印つけられないようにしますか。

イタチさんは弟思いのいい人ですからね・・・。

そんな人が死んでしまうなんてもったいないので。

とりあえず、あまりイタチさんに負担かけない様にしますか。

あ、もうこんな時間ですね。

とりあえず寝ます。

今気づいたことが１つ。

身長がニッチよりも低いです。

まあ、７班にはいれるとは原作加入能力で、わかりますが。

タズナさんにバカにされそうですね。

まあ、どうでもいいですか。

寝ましょう。

1話　アリスの誕生？（後書き）

誤字、脱字などの報告おねがいします。

アトバイスや感想もお待ちしております。

2話　アカデミー卒業試験。（前書き）

いっきにとびます。

2話　アカデミー卒業試験。

こんにちは、アリスです。

今日は、アカデミー卒業試験とかいうやつですね。

もちろん、課題は分身の術ですが。

ナ「げええええっ！俺の苦手な術だってばよ・・・」

うん。ここも原作どおりですね。

それにしても、これ終わったら報告ですか。

その後は自由行動っていわれてますし・・・

ま、ここはミズキの傍観でもしますか。

あ、サスケさんが出てきましたね。

そういえばこの試験ってランダムなんですよ。

なんというか・・・、くじであたった人から呼ばれて、そのままいくって感じですね。

まあ、あまり何番目でも別にいいですけど。

サスケさんが先にしても、結果額当てをみれば、合格したか分かりますし。

後でも、少しまってれば分かることですから。
ナルトさんは、原作どおり失敗するはずですから。
特にきにしなくても、大丈夫でしょう。
「次ッ！アリス！」
あ、呼ばれましたね。
それでは、いってきます。

イ「いつも通りにするんだぞ」
「はい。分かりました」
んーどうでしょう。
一応分身の術は、得意というキャラで言ってますから・・・・
3～6くらいでいいでしょう。
『変化ッ！』

ボンッ　（煙が出た音）

するとアリスが5人になっていた。

イ「よしっ！合格だ！」

うん。疑われていないから、大丈夫だね。

得意だし、5人ぐらいでても普通だとおもってたんですね。

今の状態で本気だしたら何体でるんでしょう・・・

大体1万はでますよね。軽く。

まあ、早く報告しないと・・・。

額当てもらって、普通に挨拶っと。

「先生！ありがとうございましたっ」

そして満面の作り笑い。

うん。これで演技は完璧ですね。

はあ、それにしてもこのアカデミーのレベルに合わせるって結構面倒くさいです。

レベルが低すぎるんです。

もう面倒くさいってほどじゃないですね。

なんど行きたくないとおもったか・・・。

早く家に帰って報告しないと・・・。

あ、サクラさんですか？

サクラさんは、監視対象にもなっていないんで、

自分の中では、モブキャラ程度しか思ってません。

しかもいつもいつ「サスケくぅぅ～ん！！私合格したよぉぉ～」

はい、こうです。

すっごいうざいです。

はっきりいって邪魔でしかありません。

サクラさんもそうですが、イノさんも同じ感じですし。

はっきりいってどうでもいいですから。

でも同じ班になるのは本当はやめてほしいかな・・・。

なんかネギま！とかでよく見るアンチっていうのをやってみましょうかね・・・。

・・・面倒くさいですからやめときましょうか。

おっと、そういってる間にもう家についていました。

さっさと報告書かいて、渡しましょうか。

ほとんど誰にも見つからない洞穴があるんですよ。

そこで報告書を渡してるわけですが。

原作の場所と、すぐ近くなので。

早くいかないといけませんね。

結界はって・・・マカの能力をつかって、鉛筆を5本持ちます。

そして報告書を一気に書く！

こうしたら1分くらいでもうできちゃいますからね。

筆跡は私の字と同じですし。

ちなみに能力のことは、暁全員に話してありますから、驚かれませんし。

で、書き終わったので、さっさと渡しにいきましょうか。

――――――――アリス移動中――――――――

よし、着きましたね。

早く渡しちゃいましょうか。

結界はって・・・と。

ゼツさーん。

ズズズズズッ　（岩の壁から出てくる音）

（白いほうと黒いほうの名前忘れてしまったので、白と、黒で分けます。）

白「もう終わったのかい？早いね」

黒「デ、報告書ハドコニアル？」

「はい、これです」

白「毎回悪いね。ありがとう。」

「で、こっちをイタチさんに渡してくれませんか？」

黒「アア、ワカッタ」

「ありがとうございます。次の報告は何時ですか？」

白「大体中忍試験前くらいのときに報告をお願いするよ」

「わかりました。では」

ズズズズズッ　（岩の壁に戻っていく音）

「さて、と。まずは、傍観ですね」

そういって少しあるいてから気づいた。

「そういえば火影は水晶玉からなんか見てるんですよね」

・・・・そうだ。

「結界張って、自分のことを認識できなくしましょう」

言わば、ネギま！でいう、認識障害魔法ですね。

まあ、魔法なんてオカルトなモノでもないですが。

とりあえず、結界はって・・・

ついでに気配も消して・・・っと。

よしっ、傍観いきましょうか。

――――――――アリス移動中――――――――

うん、いますね。

ミ「・・・・・ま・・・・・た！・・・・・なんだよ！！」

ああっ、少し遅かったですね。

まあいいです。

ちょっとくらいおそくでも、大丈夫でしょう。

イ「そうだよなあ・・・さびしかったんだよなあ・・・・・・」

イルカ先生がナルトさんをかばってますね。

ナ「な、なんで・・・俺なんかを・・・」

ここら辺はつまらないですね・・・なんか漫画とかで、よくある展開ってモノですね。

ちょっときながして、最後のほうに移動。

少しまっていたらナルトさんとイルカさんがきましたね。

イ「ナルト・・・少し後ろを向いて、目をつぶっていろ」

おっ。額当てをつけてますね。

ナ「えっ・・・？」

イ「卒業・・・おめでとう！」

ナルトさんよかったですね・・・

あ、でも今考えたら、私というイレギュラーが入ったらスリーマンセルじゃなくて、フォーマンセルになりますね。

そこは修正力とやらが働いて、まあ、大丈夫ですよね。

イ「よしっ！それじゃあ今日は、俺が一楽のラーメン奢りだ！」

ナ「本当だってばよ！？やったー、いっぱい食べるってばよ！」

終わったみたいですし。戻りましょうか。

瞬身の術で家にすぐさま移動。

もう寝ますか・・・。

一方。火影のところでは・・・。

火「ふむ・・・これはなんじゃ？」

そこにあったのは、ちょっとぼやけたようなものが映っていた。

元々、認識障害魔法的なものなので、耐性があるならば、少しはみえるようになっている。

なので、少しだけ耐性のあった火影は、うっすらとみえる、ぼやけたようなものに調査をするように忍に頼んだ。

ちなみにこのことをアリスは知らなかった。

2話　アカデミー卒業試験。（後書き）

2話です。

少しは長くかけたかと思います。

アトバイス、感想、誤字脱字等等。

報告お願いします。

3話　下忍選抜試験　1。（前書き）

3話ですー。

3話　下忍選抜試験　1。

こんにちは、アリスです。

まだ、私というイレギュラーが入って、異常とかがまだ起こってはいません。

このままでなければいいですが・・・。

さて、今日は班発表ですね。

イルカ「いいか、下忍は大抵3人(スリーマンセル)で任務が行われる」

等と、色々説明をした後に、班発表が。

・・・・・・・・・・

イルカ「・・・次！6班！・・・！・・・！・・・・！」

あ、もうすぐですね。

イルカ「7班！春野サクラ！うちはサスケ！うずまきナルト！それと・・・うちはアリス！」

ざわざわ・・・とし始めましたね。

一応サスケさんは人気ですから、女子からの嫉妬でしょう。

イノ「先生！何で7班は3人(スリーマンセル)じゃなくて、4人(フォーマンセル)なんですか！？」

やっぱりですね。

ナルト「先生！何でこの優秀な俺が！こんな（サスケさんを指で指す）やつと一緒にしなくちゃいけないんだよ！！」

イルカ「ナルト！お前は失敗ばかりするドベだから成績的に優秀な、サクラとサスケを入れたんだ！それでも、少し足りないくらいだから、少し成績のいいアリスを入れたんだ！！」

サスケ「せいぜい足を引っ張らないでくれよ、ドベ」

ナルト「な、なんだとおおおお！！！」

あーあーあー。喧嘩しちゃってますよ。

まあ、しょうがないですよね。

ライバルと、先生にドベっていわれたんですし。

ここはとめるかとめないか・・・。

・・・ていうか、女子からの嫉妬の視線がすごくいたいです。

多分、うちはということと、同じ班ということでしょうね。

あ・・・そういえば。

自己紹介・・・どうしましょう。

あ、班発表もおわった見たいですし。

とりあえず、上忍がいるって場所にいきましょう。

――――――アリス移動中――――――

教室につきました。

はい。カカシ先生遅いです。

気配はしますが・・・大体アカデミーから、５?くらいでしょうか。

はい。今の時刻を知るために、時計見てみましょう。

班発表終わり時刻　１０時３０分

上忍教室に到着時刻　１１時まで

今の時間　１時３０分

はい、２時間３０分の遅刻です。

あ、ナルトさんが立ち上がって・・・

ナルト「ニシシシシッ」

サクラ「ちょっと！何やってるのよ！」

ナルト「遅れてくるほうが悪いんだってばよっ！」

サクラ「もう！私知らないから！（内なるサクラ：私こういうのすきなんだよねー！！）」

サスケ「上忍がそんなブービートラップに引っかかるかよ」

サスケさんがフンッと鼻を鳴らして目を他のところに移した。

サクラさん。内なるサクラさんが見え見えですよー。

因みに私は、あまり関係のないように、体育座りをして顔を下に埋めています

他の人からみたら、寝ているように見えているはず。

あ、カカシさんの気配がかなり近づいてきました。

おそらく扉まで３１６?ちょいでしょうか。（正確には、３１６?１２?）

カカシさんは少し走ってますね。

おそらく残り１分３０秒・・・

・・・・・１分・・・・・５０・・・・・４０・・・・

３０・・・・・２０・・・・・じゅ「ちょっと!アリス!おきなさいよ!」（サクラの声）・・・・・・

高速で頭の中で、アニマル会議しています。

熊「ここは無視したほうがいいんじゃないかクマ?」

兎「でも、騒がれるとすごくうざいんじゃないかぴょん?」

狐「ここは実力こうし「だめだクマ／ぴょん!!」・・・」

犬「それじゃあここは多数決だワンっ」

熊「無視したほうがいいとおもう獣はっ！・・・・二十数名だクマ」

兎「それじゃあ起きたほうがいいとおもう獣はっ！・・・・十数名だぴょん」

狐「ここはやっぱり実力行使で「だめだクマ／ぴょん！！」・・・・・あ、皆手あげたコン」

兎、熊「ええええええええええええっ！！なんて戦闘狂（バトルジャーキー）な獣だクマ／ぴょん！！」

兎、熊「狐以外の案できめるクマ／ぴょん！！　だから、無視することにするクマ／ぴょん！！」

ここまででかかった時間・・・０．０００００１秒にも満たしません。

ということで・・・無視！

サクラ「ちょっと！！アリス！！きいてんの！！」

無視・・・無視・・・無視・・・無視・・・。

サクラ「もう！先生きてもしらないから！」

ニヤッ・・・いい事思いついた。

先生が来た瞬間にとびだして、切りつけようとする！これいいですね！

もちろん、下忍と分かるくらいの速度で。

先生がいってきたら、言い訳しちゃいましょう。

残り、１メートル・・・・

殺気はできないとわかってるっておもってるので、出しません。

・・といっておけば、大丈夫でしょう。

１０センチ・・・

ガラガラガラッ

今です！

スッ

カキン！！！　（クナイとクナイが合わさる音）

カカシ「ったく、危ないでしょーが」

ニヤリと作り笑顔を作って、

「先生がおくれてくるのがわるいんですよ」

お、サスケたちがすごくびっくりしてる。

カカシ「んーまあ、お前達の印象は・・・・嫌いだ！！」

ジャンプして・・・・ばくてんして・・・・・椅子にストンッと座る
っと。

・・・・・・・・

すごく嫌な空気になりました・・・・

まあ、私は悪くないですし。

大丈夫でしょう。・・・・多分。

3話　下忍選抜試験　1。（後書き）

ちょっとした攻撃シーンをいれてみました。

駄文ですみません。・・・・

4話　下忍選抜試験　2。（前書き）

1日に2回投稿できました。

4話　下忍選抜試験　2。

カカシ「あー。とりあえず・・・・自己紹介をしてもらおうか」

あの空気を変えるようにカカシさんが自己紹介をしてもらおうといいました。

サクラ「先生！何を言えばいいですか？」

カカシ「んーそうだな・・・好きなものに嫌いなもの。将来の夢や趣味などだな」

サクラ「それじゃあ先生が先に自己紹介してください！」

ナルト「そうだってばよ！！ずっとまってたんだってばよ！！」

カカシ「ん？俺か？俺ははたけカカシ。好きなものと嫌いなものはお前らに教えても意味ないだろう。将来の夢っていってもなあ・・・・趣味は・・・まあ、色々だ。」

サクラさんがサスケさんに「ねえ、結局わかったのって名前だけじゃない？」って耳打ちしてますね。

そういえばサスケさんはさっきからこっちを睨んでくるんですが・・・あの・・・やめていただけませんか・・・？

カカシ「それじゃあ、そこの金髪君からね」

ナルト「俺さ！俺さ！好きなものはラーメン！もっと好きなものは

イルカ先生におごってもらった一楽のラーメン！嫌いなものは、カップラーメンを待つときの3分間！将来の夢は火影になる！！でもって、里のみんなに俺の存在を認めさせてやるってばよ！！！」

カカシはなるほどなあ・・・という表情でうなずく

ナルト「趣味は・・・・悪戯かな」

カカシ「それじゃあ、そこの桃色の髪の女の子」

サクラ「私は春野サクラでぇ～好きなものはぁ～いや、好きな人もいっちゃおうかなぁ～」

サクラさんがキャーとかいいながら手で顔を隠してる。

サクラ「嫌いなものは、ナルトです！！」

ナルトさんが、ガーンという拝啓がついてきそうなくらい落ち込んでます。

サクラ「趣味はぁ～～」

カカシさんが、ここら辺の女の子は忍よりも、恋なのね・・・っていうような感じな表情してますね。

カカシ「それじゃあ、そこのうちは一族の男の子」

サスケ「名はうちはサスケ。嫌いなものは色々あるが、好きなものは得にない。それと、夢なんかで終わらす気はないが・・・野望はある！！！うちは一族の復興と、ある男を必ず・・・殺すことだ」

カカシさんはやっぱり・・・という表情で何かを考えてますね。
サクラさんはよくわかるとおもいますが、「キャーかっこいい！！」とかいいながら目をハートにしてます。
はっきりいいます。気持ち悪いですよ。
カカシ「んじゃあ最後のうちはの女の子」
おっと、私の番ですね。
「私の名前は、うちはアリス。好きなものは、野菜に果物。嫌いなものは、肉ですね。将来の夢はSランク任務を受けれるようになることです。趣味は・・・修行ですね。」
普通に、満面の作り笑顔をしながら答える。
こうしたら疑われにくいですし。このほうがみんなと同じような感じですからね。
カカシさんは（これからカカシ先生に変えます）うん。普通だなっとおもっていますね。
ほら・・・ね？
カカシ「よし。自己紹介は終わり、明日から任務をするからな」
2人が少し反応した。まあ、私の将来の夢はSランクって言っちゃいましたし。

とりあえず、作り笑顔を続けていましょう。

カカシ「まずは、俺ら5人でやるサバイバル演習だ」

4人が5人になっていますね。

私が入ったからでしょうか？

サクラ「なんで今さら演習なんかするのよ！演習ならアカデミーでさんざんやったわよ！！」

サクラさんが講義する。

カカシ「相手は俺だが、ただの演習じゃない」

サクラ「どんな演習よ！！」

カカシ「いや・・・ただな。これ言ったらお前ら絶対引くから」

ですよねー。脱落率６６％の演習っていったら。

カカシ「卒業生二十七名中、下忍と認められるのはたった九名。残り十八名はアカデミーに戻される、脱落率６６％以上の超難関テストだ！」

三人とも引いてますね。

え？私ですか？

私はもちろん引いている' ふり' です。

サクラ「卒業試験をやったじゃない！あれはなんだったのよ！！」

カカシ「それは、下忍になる可能性のあるやつを選抜するためだろ？」

カカシ先生はなにいってんだよ？こいつ。的な目でサクラさんをみるというかサクラさんギャーギャー五月蝿いです。

黙るという言葉を教えたほうがいいのでしょうか？

カカシ「それで、お前らの合否を決める。忍具はもってこい。それと、朝飯は抜いて来い！・・・・・吐くぞ」

最後のほうがなぜか脅迫にみえたんですが、気のせいですか？

カカシ先生は、プリントを配っていく。

忍具や、朝飯や、”集合時刻”など。←ここ大事！！7時からです！

私は、朝飯を食べてきます。もちろん。

3人とも、それだけきつい事と勘違いしているようですし。

カカシ「詳しいことはプリントにかいておいたから、皆遅れてこないように」

カカシ先生。あなたがそれ、言えることですか？

――――――火影のいる部屋――――――

火影「どうだったかな？7班は」

カカシ「はい。うちは一族2人に九尾の妖狐、春野家ですね」

カカシ先生と火影のおじいさんが何かを話している。

カカシ「うちは一族のアリスがいきなり攻撃をしかけてきましたよ・・・」

火影「時間に遅れたから・・・かの？」

カカシ「はい。そのとおりです。それと。うちは一族のサスケはやっぱり、復讐の事をいっていましたね・・・」

火影「そうか・・・引き続き、たのむぞ」

カカシ「はい、わかりました」

――――――アリス移動中――――――

そうですね・・・明日はお弁当をもっていきましょう。

それに、皆食べていないとおもうので、携帯食料を。

吐いても大丈夫なように、袋を。

・・・・と色々準備をしているアリスでした。

――――――ナルト移動中――――――

ナルト「えーと、ここをこうして、こうしてこうだってばよ！！」

ナルトさんは布団の上で、カカシの絵が書いてある、枕をサンドバックとして

殴り続けていた。

そんなことをしても意味がない。

枕なので、動かないからあたるだけで、本番は殴っても当たらない。

他にも、サスケさんの絵が描いてある枕もあった・・・

――――――サスケ移動中――――――

サスケさんは、そんなナルトさんみたいなバカなことはしないで、出来ないとわかっていても。修行をしていた。

少しでも強くなったほうがマシだろうとおもって・・・だとおもう本当は、イタチさんを超えるためにやっているだけかもしてないけど。

――――――サクラ移動中――――――

サクラさんは、まあ、簡単なやつだろうと油断をしていた。

下忍選抜試験なんだから、下忍の私でもできるだろう・・・と。

それで、ナルトは別におちてもいいや、私とサスケくんがあがれば

いいと、おもっていた。

そう考えているうちは、あがれるわけがないのに・・・。

――――――――アリス移動中――――――――

アリスは、６時に起きた。

そして、朝ごはんをたべ、弁当を作り、マカの能力で忍具を十分につくっておき、

袋など、色々なものを用意して、

「行ってきます」

と言い、集合場所に行った。

アリスは、カカシ先生が遅れてくることを知っていたため、修行をしようとしていた。

因みに、アリスが忍具がはいっているポーチを忘れて、家に走って帰ってきたのは、秘密です。

4話　下忍選抜試験　2。（後書き）

駄文ですみません・・・・

アトバイスや、誤字脱字報告。

感想など、お待ちしてます。

5話　下忍選抜試験　3。（前書き）

5話目ですー。

5話　下忍選抜試験　3。

こんにちは、アリスです。

ただ今、修行しながら遅刻魔（カカシ先生）を待っています。

時間に遅れないようにとかいいながら、自分が遅れてるんじゃないですか。

もう少ししたら、他のひとが「カカシ先生遅いってばよ！！！！」

（ナルトの声）

サクラ「遅れてこないようにっていったカカシ先生が遅れてるじゃない！！！」

ナルトとサクラたちが騒ぎ始めました。

ちなみに今の時間は、１０時２５分です。

遅刻魔（カカシ先生）が来いといっていた時間は、７時です。

３時間２５分の遅刻です。

こんどはどんな奇襲してみましょうか・・・。

もちろん下忍なみの強さですが。

そういえば、鈴をとるときは、超能力の一部、電撃使い《エレクトロマスター》を使うことにしました。

それだけでも、十分戦えるとおもいますし。

たしか、あの鈴は鉄性だったので、髪に磁力をつけたら取れるとおもいます。

何かときかれたときの言い訳も考えておきましたし。

まあ大丈夫でしょう。

――――――5分後――――――

カカシ「やあ、諸君。おはよう！」

サクラ&ナルト「おっそおおおおおおおおおいいいい！！！」

カカシ「いやあ、黒猫に前を横切られてしまってねえ。そのままにらみ合いになってしまったんだよ」

それで3時間30分も持つのですか。忍者の忍耐力はすごいですねー。

といってる間に、カカシ先生は準備を始めた。

カカシ「（カチカチカチ・・・）・・・よし、１２時セットｏｋ！」

そういえばここだけＯＫ使うんでしたよね。

チリンッチリンッチリリリッ

カカシ「いいか？ここに３つ鈴がある。これからこの鈴を、昼までに俺から奪い取れば合格だ。もし奪えなかったやつは、昼飯抜きだ！！あの丸太に縛り付けた後で、俺が目の前で食うから」

ギュルルルルッ　（腹から音が鳴る音）

３人とも腹の音がなっていますね。皆恥ずかしがってます。

私は大丈夫です。

３人の音で、私がなったとは誰もおもわないでしょう。

カカシ「鈴は一人１つでいい。だから、１人は丸太行きになるわけだ。で、鈴が取れなかったやつは、任務失敗ってことで、失格だ。手裏剣は使ってもいいぞ。俺を殺すつもりでこい」

サクラ「でも、危ないわよ！！」

サクラさん・・・・下忍が上忍に勝てるとでもおもっているのでしょうか・・・

ナルト「そうだってばよ！！危ないってばよ！」

カカシ「まあ、下忍が上忍に勝てるわけないだろ・・・。ギャーギャー騒いでいる”ドベ”はほっておいて・・・」

そこで、ドベという言葉に切れたナルトがクナイを持って襲い掛かる。・・・が。

カカシ「おいおい・・・まだスタートなんて一言も言ってないだろ？」

といいながら、ナルトのクナイを後頭部のところに持っていく。

ナルトば吃驚して、サスケとサクラは、これが上忍なんだ・・・っていうような目で見ていますね。

カカシ「ククク・・・ようやく俺のことわかってくれたか・・・お前らのこと好きなれそうだな。それでは・・・・始め！」

カカシ先生が言ったとき瞬間。

ザンッ

と音を立てて、木の影や、茂みなどに隠れた。

私はとりあえず、気配を消して見えにくい木の上に座る。

――――――――カカシ移動中――――――――

カカシ「忍者なる者・・・・・・気配を消して、隠れるべし・・・・・・」

（よし、皆うまく隠れて・・・・・）

ナルト「いざ!!尋常にしょお～～～～～～ぶ!!!」

（なかったか・・・・・・）

目の前に仁王立ちしているドベ（ナルト）に言った。

カカシ「お前さあ・・・ちと、ズレとるのお・・・」

ナルト「ズレてるのはお前の髪型のセンスだろお！！」

はあっ。とため息がでる。

このとき、サクラとサスケは「あの馬鹿・・・」とつぶやいていた。

アリスはうんうん、とうなずいて、原作どおりだ。と呟いていた。

――――――アリス移動中――――――

カカシ「ま・・・とりあえず、『忍戦術の心得　その一』・・・体術を教えてやる」

といいながら、ポーチに手を触れ、中から何かを取り出そうとした。

それにきづいたナルトは、後ろに後退した。

カカシ「いい判断だ」

といいながら、本を取り出した。

ナルトはなぜ本を取り出したわからない感じ。

カカシ「どうした？掛かってこないのか？」

挑発するように言う。

ナルト「いや・・・なんで本なんか？」

カカシ「ああ・・・これ？大丈夫だ。お前等相手だったら読んでも読まなくても平気だから」

ナルトは一瞬考え込むようにして、意味がわかったようで、

ナルト「・・・！！ぶっ殺す！！」

きれた。

ナルトは、カカシに飛び掛るが、カカシは殆ど動かないで防いでいく。

無造作に放ったキックやパンチが手や、かわされたりして虚空をきる。

そうしてやっていると、いきなりカカシ先生が消えた。

ナルト「・・・？ありゃ？」

カカシ「忍者が何度も後ろを取られるな。馬鹿」

呆然としながらキョロキョロしていると、後ろから声がした。

ナルトが、後ろを向こうとしたが。

カカシ「遅い」

サクラ「ナルト！！避けなさい！！」

カカシ先生が作っている印に気づいたサクラが、

ナルトに助言をするが・・・

カカシ「木の葉秘伝体術奥義！！千年殺し！！」

カカシはナルトに浣腸をした。

ナルト「んぎゃあああああ！！」

といいながら、湖に落ちていった。

サクラとサスケはただの浣腸に脱力していた。

アリスはここら辺どうだっていいから、早く終わらないかな・・・

とおもいながら、もうちょっと改良して、カカシ先生を倒そうかと

考えていた。

その後は、原作どおり、サクラは幻術にかけられて、サスケは地面に埋められた。

カカシ「最後はアリスか・・・仕掛けてこないのか？」

カカシが歩き回ってるときに、目の前にアリスが降りてきた。

「あれ？カカシ先生。サクラとサスケは終わったんですか？」

分かっているけど聞く。

カカシ「ん？ああ、終わったぞ」

「それじゃあ、私だけだということですね」

そして、ニヤリと笑い

「さあ、始めましょうか」

と笑いながら言った。

5話　下忍選抜試験　3。（後書き）

中途半端で終わってすみません。

5話でした。

6話　下忍選抜試験　4。（前書き）

6話です。

6話　下忍選抜試験　4。

こんにちは、アリスです。

ただ今カカシ先生に始めましょうと宣戦布告しました。

ということで、構えないでそのまま立っています。

はっきりいって構えたほうが、うごきにくいんですよ。

構えたときに、他の方向にいきたかったらその分遅れるじゃないですか。

カカシ先生が少し睨んでいる時に、少しポーチをあさります。

カカシ先生が構えました。

そして走ってこっちに来ました

でも、途中で止まりました。

カカシ先生「砂鉄か」

「よく分かりましたね、そのまま走ってたら穴あきになってくれたのに・・・」

今、磁力をつかって私の周りに砂鉄をちりばめています。

一定の距離で反発して、そこに物体が押してきてもとどまるように

計算したので、そのままはしってきたら穴あきにしてくれるという、簡単な原理です。

あ、先生がクナイを投げてきました。

でも、磁力を使って、ちょうどいいところにおいて、弾きます。

その間もポーチをあさっています。

・・・あ、ありました。

取り出したのは、手にはめる、チャクラを流して使う、爪のような武器。

それを手につけて、っと。

「行きます」

そういってから、中忍の中くらいのスピードで追い詰めます。

砂鉄はもちろんすべて地面に落ちています。

砂鉄はどこにでもありますから、結構楽に使えるんですよね。電撃使い《エレクトロマスター》は。

キンッ！キンッ！キギギッ！

武器がぶつかったり、こすれたりする音が響きます。

そして、3分ほどやりあった後に、髪に磁力を流します。

そして、鈴の近くに髪をもって、一気にだして、１つ盗りました。
そして後ろに一回転して、スタッと立ちます。
そして一言。
「私の勝ちですね」
髪についた鈴をチリンッっと鳴らしながら取ります。
カカシ「実力を隠していたのか？」
カカシ先生はなるほどね・・・って感じの顔をしながら聞いてきました。
「だってそのほうが楽しそうじゃないですか」
面白そうな作り笑いを浮かべながらいう。
「この鈴は返しますね」
と、いって鈴を返した後に、
「先に弁当食べて待っていますから」
と、一言いいながら、移動します。
そのときにジリリリリリッ！！っと音がしました。

とりあえず、瞬身の術で早く移動して、お弁当を食べ始めます。

ナルトさんたちは早くこないかな・・・

――――――アリス移動中――――――

弁当をたべていると、サスケさんとサクラさんがきました。

ナルトさんは丸太に縛られています。

原作どおり、盗み食いをしようとしたらしいですね。

サクラ「アリス！何であんたは弁当を食べているのよ！」

サクラさんがなんか言って来ましたが無視します。

カカシ「まあ、そのことについては説明するから」

瞬身でカカシ先生がきました。

カカシ「ま！とにかく、だ。お前等はアカデミーに戻る必要もないな」

サクラさんとサスケさんとナルトさんは何を勘違いしているんだか喜んでます。

といってもサスケさんは、当たり前だ・・・っていうような感じでフンッと、鼻を鳴らしただけですが。

内なるサクラ（私、何もしてないけど・・・愛は勝つ！しゃーんなろ！！）

ナルト「じゃあさ！じゃあさ！俺等全員・・・」

カカシ「そうだ。３人とも・・・忍者をやめろ！！」

３人が驚愕した顔になる

サクラ「え！なんでよ！それに3人ともってどういうこと！？」

カカシ「どいつもこいつも忍者になる資格がない餓鬼だっていうことだよ」

ナルト「それじゃあ合格の1人ってだれだってばよ！もしかして・・・」

カカシ「それはアリスに決まってるだろう」

サスケさんがより悔しがってますね。同じうちは一族なのに負けたということでしょうか。

サクラ「なんでアリスだけ合格なのよ！」

カカシ「お前等はこの試験のことについて全くわかってはいない！アリスは分かってるかもしれないが・・・それに、1人で俺から鈴も奪ったしな・・・ま、お前等よりは忍者によっぽど向いているって言うことだよ」

キレたサスケさんがカカシ先生に走って襲い掛かりましたが、

カカシ先生に押さえつけられてしまいました。

サクラ「サスケくんを踏むなんてダメぇーー！」

カカシ「お前等なめてんのか？ああ！？」

カカシ先生も怒り出したでしょうか。

カカシ「この試験の目的を言うぞ。アリス、分かるか？」

「はい、分かりますよ」

サクラ「え？じゃあさ？鈴がなくても合格できたってこと！？」

「そうですよ？」

私がいうと、サスケさんは視線をカカシ先生に移しました。

ナルトさんは、肩を落としましたね。

サクラさんは怒っていますね。

「この試験の目的は”チームワーク”でしょう？カカシ先生」

カカシ「そうだ、正解だ」

サクラ「なんで鈴が3個しかないのに、チームワークなわけ！？4人で鈴を取ったとしても、1人は必ず脱落になるじゃない！それだと、チームワークどころか、仲間割れよ！！」

サクラが講義しましたが、カカシ先生は、

カカシ「当たり前だ！これはわざとチームワークを崩すために仕組んだ試験だからだ！それなのに、お前等といったら・・・」

一息ためて、

カカシ「ナルト！お前はただ一人で我武者羅に独走するだけ！サク

ラ！お前は、どこにいるかもわからない、サスケを探して探し回っているだけ！サスケ！お前は、仲間３人をただ、足手まといときめつけて個人プレーをするだけ！任務は３人（スリーマンセル）で行う！ここの班は４人（フォーマンセル）だが・・・」

サクラさんが、アリスはどうなのよ！とか言っています。

「それは、皆の性格的に考えて、やってくれる可能性は低いと判断したからです。それに、もう鈴は私とりましたし」

カカシ「そのとおり、だ。チームワークを乱すプレイは仲間を危機に陥れることになる。たとえばだ！」

チャキッと音を立てて、サスケさんの首の横にクナイを置きました。

カカシ「サクラ！ナルトを殺せ！さもなくば、サスケが死ぬぞ！！」

と、言いながらサクラさんを脅しています。

サクラは、本当に殺そうかとおもっていますね。

カカシ「と、仲間を人質に取られた挙句、無理な選択を迫られ、殺される。お前等は、そういう世界に入ろうとしているんだぞ！」

と言ったら、石碑のところまで歩いていきました。

カカシ「この石碑に書かれている人達は、皆『英雄』と、呼ばれている忍者達だ」

と言ったら、ナルトさんが反応しました

ナルト「あー！！それイイーー！！俺もその英雄と書かれている石碑に名前を刻むことに決めたってばよ！！」

カカシ「だが、ただの英雄ではない」

ナルト「どんな英雄なんだってばよ！」

カカシ「任務中、殉職した英雄達だ」

というと、ナルトさんが何もいえなくなってしまった。

カカシ「ここには、俺の親友の名も刻まれている」

そうなるとナルトはちょっと落ち込む。

カカシ「最後にもう一度チャンスをやる・・・挑戦したいやつだけ弁当を食え！ただし！ナルトには食わせるな！」

ナルト「エエ！？」

カカシ「ルールを破って食べようとした罰だ！食べさせようとしたやつは、失格にするからな。ここでは俺がルールだ！・・・わかったな」

最後に下忍でも分かる程度の殺気を送った。

私？私はもう合格しているし、弁当を食べ終わっています。

ナルト「へ・・・へっへーんだ！俺は別に弁当なんて食わなくたっ

て・・・」

といいった後に、ギュルルルルッっと音がしました。

「仕方がないですね、はい。どうぞ」

私は、自分で作ってきた弁当を渡す。

サスケ「ほらよ」

サスケさんも、弁当を出しています。

サクラ「ちょっと！アリス！先生は・・・って、サスケくんも！？」

「私のは大丈夫ですよ、家で作ってきたものですし」

サスケ「大丈夫だ。今はカカシの気配はない。・・・昼からは、４人で鈴を取りに行く」

サクラ「そういうことじゃ・・・・ああ、もうっ！」

一瞬考え込んでから、自分の弁当をナルトさんに差し出す。

自分の中で、サクラさんに対する意識がモブさんから、他人に代わりました。

よかったですね。サクラさん。あがりましたよ。

ナルト「へへへ・・・有難うってばよ」

といいながら、弁当を食べようとする。

だけど、

ボンッ

カカシ「お前等あああああああああああああ！！」

ナルトさんとか、サスケさんとかが、驚いている。

サクラさんはキャーっていってますね。

私はそのまま弁当を片付けています。

カカシ「合格っ！！」

すごい笑顔で言ってきました。

6話　下忍選抜試験　4。（後書き）

中途半端でおわってすみません。

やっぱり戦闘描写は難しいですね。

8話でした。

7話　下忍選抜試験　5。（前書き）

総合ＰＶアクセス７４９０　ユニークアクセス１３３６　お気に入り登録９件になりました。

有難うございます。

７話ですー。

7話　下忍選抜試験　5。

ナルト「え？・・・合格！？なんでってばよ！」

カカシ「お前等が始めてだ。今までは、俺の言うことだけを聞いているボンクラばかりだったからな」

まあ、普通そうなりますよねー。

上忍の言うことが正しいとかおもっちゃう人いますからね。

カカシ「忍者は裏の裏を読め。掟を破るものは、クズ呼ばわりされる」

カカシ「けどな、仲間を大切にしないやつはそれ以上のクズだ！！」

わお。私の聞きたかった台詞第６位がでてきました！

カカシ先生が言った後に、意味が分かってきたのか喜びの表情が出てきました。

カカシ「これにて、第７班演習終了！全員合格！！明日から任務開始だ！！」

ビシッ！って音を立てて、カカシ先生が親指を立てた。

ナルト「やったってばよ！！忍者！忍者！！忍者！！！」

まあ、ナルトは喜びますよね。火影への第一歩を踏み出したって所

ですし。

カカシ「よし、帰るぞ」

サクラさんは、しゃーんなろ！っていいながら歩いて、サスケさんは、フンッと、鼻を鳴らしながら帰りました。

私は残ります。

理由は・・・

ナルト「って！！こういうオチだとおもったってばよ！！縄ほどけええええ！！！！」

ってなるからです。

クナイでパシッと、縄を切りました。

ナルト「お、ありがとうってばよ！アリス！」

そのまま走っていきました。

私もそのまま帰りました。

――――――カカシ移動中――――――

（アリスは実力を隠していたのか・・・）

カカシは、そうおもいながら火影のいる部屋に歩いていった。

（それにしても、性質変化までつかえるとは・・・）

アリスの強さに関して、考えていた。

髪に出ていた電気を、性質変化とおもっていた。

実際は違うんだが。

（まあ、難にせよ、火影様に報告しなくては・・・）

火影の部屋についたカカシは、火影にそのことを話した。

火影は、アリスを監視するように、カカシに頼んだ。

実は、これがアリスの作戦だとは知らずに。

――――――アリス移動中――――――

演習がおわったアリスは、今日の報告書を書いていた。
結界を張って、わからないように。
なるべく、行事があったときは報告書を書くようにしている。
忘れることはまずないが、書いたほうが楽だという。
報告書を書き終わったアリスは、買い物に出かけた。

そして、偶然を装ったカカシ先生に会った。
カカシ「よお。アリス」
「こんにちは、カカシ先生」
カカシ先生の気配があったことは、アリスは知っていた。
でも、そこでいうと、もっと怪しまれてしまうので、まだ怪しまれたくはないので言わなかった。
そして、他愛のない話をしていたら、アリスの強さについてカカシ先生が聞いてきた。

カカシ「アリスは、趣味が修行と言っていたがどんなことをしているんだ？」

「そうですね・・・走りこみとか、チャクラ性質についてとか・・・」

カカシ「ということは、性質変化を使えるのか？」

「はい、そうですよ？」

本当は、性質変化ではないのだがあえて嘘をついた。

後から言ったほうが、危険度を高くすることが出来るため、今は嘘をついて誤魔化しておこうということだった。

その後も、カカシ先生がアリスの強さについてさりげなく聞いてきたりした。

アリスは、嘘を交えながら、質問に答えていった。

一通り聞き終えると、カカシ先生は、別れていった。

アリスは、そのまま買い物を終わらせ家に帰っていった。

家についたら、もうすでに6時だったため、夕食の準備に取り掛かった。

そしてそのまま食べ終わったら、整理などをして、寝た。

7話　下忍選抜試験　5。（後書き）

すっごい中途半端に終わってすみません・・・

7話でした。

誤字脱字報告お願いします。

8話　波の国護衛任務　1。（前書き）

8話ですー。

1日2話投稿できました。

8話　波の国護衛任務　1。

7班の下忍選抜試験が終わってから早2週間

ただ今犬の散歩をしています。

ナルト「うお！こら！！俺の言うことときけってばよ！！」

ナルトさんはかっこつけたがって、大きい犬を選びました。

こっちは、小さい犬ですが。

サスケさんも、中の上くらいの犬を選びました。

サクラさんは、少し小さいくらいの犬を選びました。

ナルトさん以外の犬は安定してますが、ナルトさんは犬に振り回されてばっかりです。

他にも色々な任務がありました。

子守をしたら、ナルトさんが担当している赤ちゃんが泣き出したり。

芋ほりをしたら、ナルトさんが転んでドロだらけになったり。

ほとんどナルトさん以外に被害はでていませんが、ナルトさんは災難続きですね。

で、犬の散歩が終わったので、とりあえず火影様に報告に行きまし

た。

火影「えー、カカシが率いる7班の今日の任務は・・・隣町へのお使いに・・・大名様のペット『トラ』の捜索&保護、じゃな・・」

ナルト「ダメえーーー!!そんなのノーサンキュッ!!!オレってばもっとスゲエーー任務がしたいんだってばよ!!」

サスケさんは一里あるな・・・というような表情を浮かべている。

サクラさんは何言ってるのよ!馬鹿!!と、ナルトさんを怒鳴りつけている。

そういえば、トラの捜索は2日前にやったばかりじゃないですか・・・。とアリスは他の事を考えていた。

カカシ先生は、そろそろ言うころだとおもった・・・というような表情を浮かべていた。

イルカ「コラーーーーナルトーーー!!お前はまだペーペーの新米だろうが!!誰でも最初は簡単な任務なんだぞ!」

イルカ先生がナルトさんに言う。

ナルト「だって!!この前からずっとショボイ任務ばっかりじゃん!!!」

火影「ナルト・・・お前には任務がどういうことかを説明する必要があるな」

そういって、火影は任務の説明を始めた。

任務は、ＤＣＢＡＳ（弱い←――→強い）があって、里には子守りから、暗殺までの任務が入ってくる。

下忍はＤ．Ｃのランクが適切で、中忍がＣ．Ｂのランクが適切、上忍がＢ．Ａのランクが適切だという。

ただし、Ｓランクは、暗部や上忍などの経験がある忍者に任されている。

ということだという。

ナルト「あーあー！！オレってばもう火影のじっちゃんやイルカセンセーがおもっているようなイタズラ小僧じゃねえーーんだぞ！！」

フンッと鼻を鳴らしてそっぽを向いたナルト。

火影はそうか・・・とおもいながらこういった

火影「お前がそこまでいうのなら・・・しかたない特別にＣランク任務を授けよう。ある人の護衛じゃ」

（それに・・・・アリスのことも調べられるしな・・・）

ナルト「誰！？誰！？もしかして、いいトコのおじょーさまとか！？」

火影「そうあわてるな・・・今から紹介する。・・・・入ってもらえますかな？」

火影がそういうと扉から依頼人が入ってきた。

リュックを背負って、鉢巻をして酒を飲んでいるおじさんだった。

??「なんだあ?超ガキばっかじゃねえか!特にそこのちっこいアホずら!お前、それでも本当に忍者かあ!?」

ナルト「あはは~誰だ?一番ちっこいのって」

背を比べをした。

私が一番小さかった・・・

とりあえず、端で体育すわりをして落ち込んでいた。

??「ああ、ちなみにオレンジ色の髪のほうだから、そこの譲ちゃんじゃねえぞ?」

ナルト「!!ぶっ殺す!!」

少し立ち直った。

見ると、カカシ先生がナルトさんを抑えてた。

サクラさんは、ナルトを怒鳴りつけていた。

サスケさんは、フンッと、鼻を鳴らして、視線を他のところに移していた。

依頼人の名前は、タズナというらしい。

タズナ「おい・・・本当にこんな班で大丈夫なんだろうな・・・？」

カカシ「ははは・・・上忍の私がいますから大丈夫ですよ・・・」

タズナさんは、カカシ先生に聞くが、カカシ先生は乾いた笑みを浮かべている。

タズナ「わしは橋作りの超名人、タズナというもんじゃ。わしが国に帰って橋を完成させるまでの間、超護衛してもらうぞ！」

自己紹介を終えたタズナさんは、酒をまた飲み始めた。

そのまま、準備をするために皆はそれぞれ家に帰って、明日の出発の用意をした。

イルカ「あいつら・・・大丈夫でしょうか・・・」

火影「うむ・・・上忍のカカシがついているから大丈夫だとはおもうんじゃが・・・」

6人が行った後に不安が出てきた2人だった。

次の日、準備を終えた4人が集合場所に集まったが、カカシ先生はまだきていなかった。

その1時間後にカカシ先生は到着した。

カカシ「いやあ、諸君。おはよう！」

ナルト&サクラ「おっそーーーーい！！！」

カカシ「まあまあ、今日は道に迷ってしまって・・・・」

サクラ「はい、嘘！」

カカシ先生の嘘をあっさり見破ったサクラさん。

タズナ「本当に大丈夫なんだろうな・・・？」

また不安がこみ上げてきたタズナさんだった。

8話　波の国護衛任務　1。（後書き）

中途半端でおわってすみません。

8話でした。

9話　波の国護衛任務　2。（前書き）

1日休んでしまってすみません。

9話ですー。

9話　波の国護衛任務　2。

カカシ「ははは・・・上忍の私がついているので、ご心配なく・・・」

そういうカカシ先生も一時間も遅れてきているので、説得力がなかった。

タズナ「本当か・・・？」

ですよねー。心配ですよねー。

カカシ「さて、行きますか」

カカシ先生がいうと、皆が歩き出した。

そして、『あん』とかかれた扉を抜け、道をあるいた。

サクラ「タズナさん、タズナさんがすんでいるところって、波の国でしょう？」

タズナ「ああ、そうだが？」

サクラさんがタズナさんに聞くと、こんどはカカシ先生に振った

サクラ「カカシ先生、波の国にも忍者はいるの？」

カカシ「いや、波の国に忍者はいないな」

そういうと、里や忍者について話した。

大抵の他の国には文化や風習こそ違うが、隠れ里が存在して忍者がいて、その中でも『木の葉』、『霧』、『雲』、『砂』、『岩』は忍び大国とも呼ばれている、で、里の長が『影』の名を語れるのもその五カ国だけだそうで、その火影、水影、雷影、風影、土影のいわゆる五影は全世界各国の何万といる忍者の頂点に君臨する忍者のようです。

サクラ「へー、火影様ってすごいんだあー（内なるサクラ：あの爺がそうなのか？）」

明らかに違うこと考えてますっていう表情をしています。

カカシ「・・・お前ら、火影様のこと疑ったろ？」

すると、サスケさん以外がビクッと、反応して汗をだらだらとかいていた。

そういう反応したら、隠せてないですよ・・・。

カカシ「ま、安心しろ。Cランク任務で、忍者同士の戦いなんかしないから」

サクラ「んじゃあ、外国からの忍者の接触はないんだ・・・よかったあ。」

カカシ「もちろんだよ。そうだったら戦死者が多くなるだろ？」

・・・おや？ここ一言多くなってませんか？

まあいいでしょう・・。

そのとき、タズナさんの表情がちょっと強張ったのを見た。

カカシ先生をみると、何かを考え込んでいた。

――――――5分後――――――

しばらくあるいてると、水溜りがあった。

サスケはあまり考えずにそのまま過ぎていった

サクラは気にもとめずそのままサスケさんに寄って行った

カカシ先生は、わかっていながらわかっていない振りをしてそのまますぎていった。

ちなみに私は、自分が作った靴で水溜りをわざとで、しかも強く踏みつけた。

カカシ先生は驚いた表情をつくった。

サスケさんは、チラッとみただけで、あまり気にしなかった

サクラさんは、もう！何やってるのよ！と言って、こちらにちかづ

いてきた。

そして、カカシ先生に向かって、作り笑顔をした。

そして、少しはなれたときにあの2人が飛び出してきた。

??「「一匹目」」

といって、爪をカカシ先生に向けて・・・・・・ってあれ?

私に向かってる?

あ、さっき踏みつけたから、それの仕返しとかそういうやつでしょうか。

しかも、頭が少し大きくなっていますし。

そうですね・・・カカシ先生のように、幻術つかいますか。

巻きつかれる瞬間に幻術を使って、カカシ先生にギリギリで解けるくらいの幻術をはる。

そして、一瞬で変わり身の術を使い、草むらに隠れる。

幻術は、出来るだけグロく見せた。

まず、上下がブチッと、ちぎれて首もちぎれて、内臓がグシャっと、飛び出すように見せた。

サクラ「アリスッ!!」

ナルト「う、うわあああああ！！」

サスケ「！？」

それぞれの反応を見せてくれました。

サクラ「ッ！タズナさん！私の後ろに！！」

自分の中で、サクラさんへの対象意識が”他人”から、”知り合い”にかわりました。

よかったですね。サクラさん。

そして、その2人はカカシ先生のほうに行った。

？？「「二匹目」」

そして、鎖をカカシ先生に巻きつけてまたブシュッとグロくなるように、カカシ先生が幻術をかけました。

？？「「三匹目」」

その次に、ナルトさんのほうに行きました。

ですが、サスケさんに倒されました。

ナルトさんは悔しそうにしていました。

カカシ「サスケ、ナイスだ。」

といいながら、茂みから出てきました。

ナルト「カカシ先生！生きていたってばよ！？」

そうですね。私も出ますか。

「カカシ先生、幻術グロくみせすぎですよ」

と、私がでたら、カカシ先生以外皆すごく驚いた表情で見ていた。

カカシ「いや、どうみてもあんたの方がグロいでしょーが」

「え？そうですか？」

サクラ「アリスも生きていたのね・・・」

・・・なんですかその微妙そうな顔は。

もしかして、私がいなかったらサスケさんを独り占めできるとでもおもっていたんでしょうか・・・。

私は別にサスケさんに好意を持っているわけではないですよ・・・。

カカシ「それと、サクラ、お前もその行動はナイスだ・・・それにしても、ナルトがそんなにも動けないとは・・・」

まあ、しょうがないですよね。

実戦経験はほとんどないですし、相手も殺気を放っていたわけですし。

ちなみに、あの殺気だった普通の下忍はうまくうごけないですよ。
サスケさんや、サクラさんがほんの少し耐性があっただけと、優等生だから大丈夫だったとかそういうことですからね。
カカシ「ナルト、こいつの爪には毒が塗ってある、あまり動くな毒が回るぞ」
そうカカシ先生がいうと、ナルトさんは、悔しそうに顔を歪めた。
カカシ「タズナさん」
タズナ「な、何じゃ？」
カカシ「少しお話があります」
カカシ「こいつらは、額宛てからして霧隠れの中忍・・・、霧隠れと言えばいかなる犠牲を払っても戦い続けることで知られる忍者だ」
??「・・・何故俺達の動きを見切れた」
「それは何日も雨が降っていないのに、水溜りはあるわけないじゃないですか。後、わざと踏みつけました、謝罪します、すみませんでした」
カカシに聞かれたのを、アリスが返した。
相手は、敵に謝られるとはおもっていないらしく驚いていた。

カカシ「ま、そういうことだ」

タズナ「あんた・・・何故それを知っていて、ガキにやらせた？」

カカシ「ま、俺がその気になればこいつ等なんて簡単に瞬殺できますし、それに知る必要が会ったんですよ、こいつらがのターゲットが誰であるのかを・・・」

タズナ「どういうことだ？」

カカシ先生のいってることが理解できていないのか、カカシ先生に聞く。

カカシ「つまり、狙われているのはあなたなのか・・・それとも、我々忍者のうちのどれかなのか・・・ということですよ」

9話　波の国護衛任務　2。（後書き）

すっごく中途半端でおわってすみません。

敬語になっていないところは、アリスがおもったことではないということです。

駄文、失礼しました。

駄文失礼しました、が口癖になっているような気がします・・・。

１０話　波の国護衛任務　３。（前書き）

総合ＰＶ１２６００、ユニーク２０００を超えました！

見てくださっている皆さんありがとうございます！

１０話ですー。

１０話　波の国護衛任務　３。

カカシ「つまり、狙われているのはあなたなのか・・・それとも、我々忍者のうちのどれかなのか・・・ということですよ」

そういうと、タズナさんは少し表情を変えた。

カカシ「我々はあなたが忍びに狙われているなんて話は聞いていないんです。依頼内容は、ギャングや盗賊などただの武装集団からの護衛だった筈です・・・・忍者が襲ってくるとなると、Ｂランク以上の任務になります。依頼は、橋を作るまでの支援・護衛というものだった筈です。・・・敵が忍者であるならば、迷わず高額なＢランク任務に設定された筈ですよ。何か訳ありみたいですが、依頼で嘘をつかれると困ります。これだと我々の任務外ってことになりますね」

まあそうなりますよね。

ちなみに私はタズナさんがどうなろうが知ったこっちゃありませんなんですけどね。

カカシ「まあ、里に帰るしかないか。ナルトの傷の治療もしなくちゃいけないし」

そういうと、ナルトさんがクナイを持って、自分の手の甲に刺した。

血がポタポタとおちながらも、ナルトさんは、こういった。

ナルト「・・・オレってばもう、二度と助けられるような真似はし

ねぇ・・・・・。怖じ気づいたり逃げ腰にもならねぇ・・・。この左手の痛みに誓ってやる！！オレがこのクナイでオッサンを守る！！任務続行だ！！」

それをみたカカシ先生が、うんうんと頷いていた。

カカシ「毒血をそれで抜くのはいいが、ナルト、それ以上血をながすと大量出血でしぬぞ～～～」

にっこりと笑いながら♪がつきそうなくらい面白そうにナルトさんに言うカカシ先生

ナルトは少し青ざめた。

ナルト「あーーーーー！！！止まれっ！止まれってばよ！！そんなことでしんでられっか！！」

そして、その手をカカシ先生が取って、包帯を巻こうとしたときに気づいた。

（もう傷がほとんど治っている・・・九尾の力か・・・）

真顔になったカカシ先生にナルトさんがヒヤヒヤしていた。

すると、タズナさんが覚悟をきめたような顔で、カカシ先生に言った。

タズナ「・・・・・・先生さんよ、話したいことがある。依頼の内容についてじゃ」

ですよねー。そこを話さないとまず始まりませんし。

タズナ「あんたの言う通り・・・この仕事は、あんたらの任務外じゃろう・・・実はわしは、超恐ろしい男に命を狙われているんじゃ」

カカシ「超恐ろしい男？・・・誰です？」

タズナ「あんたらも名前くらいは聞いたことがあるじゃろう・・・海運会社の大富豪、”ガトー”という男じゃ！！！」

予想の上をいく回答に表情が変わった。

サスケ「ガトーといえば・・・『ガトーカンパニー』の社長だな・・・」

そのあとのタズナさんからのいうことだと・・・

表向きでは、海運会社として『ガトーカンパニー』を経営していて、世界有数の大金持ちと言われる大富豪。

しかし裏ではギャングや忍達を使い麻薬や禁制品の密売、企業や国の乗っ取りを行っている。

裏では“闇の世界の帝王”とまで呼ばれている人物だ。

そして、1年程前。

その男は波の国に目をつけて、財力と暴力をタテにあっという間に、島の全ての海上交通・運搬を牛耳ってしまったということです。

そして、今彼が唯一恐れているのは、かねてから建設中の橋の完成すること。

ということで、その責任者であるタズナの命を狙っているのだということです。

カカシ「しかしどうしてですか？・・・相手は忍すら使う危険な相手・・・何故それを隠して依頼したのですか？」

タズナ「波の国はとても貧しい国なんじゃ・・・大名ですら、ほとんど金をもっていないんじゃ・・・勿論、わしにもそんな金なんぞもっておらん。高額なBランクの任務なんて・・・な。Cランク任務が精一杯だったんじゃ」

それがこの任務になったんですね。

タズナ「お前らがこの任務をやめたら・・・わしは確実に殺されてしまうじゃろう・・・が、なあーに！お前らが気にすることもない、わしが死んでも、１０歳になる可愛い孫が一晩中なくだけじゃ！！」

ガハハハと笑うタズナさんに私は殺意を感じた。

いっそのこと拒否してやろう、と思った。

タズナ「それに、ワシの娘も木の葉の忍者を一生恨んで寂しく生きていくだけじゃ！！！いや、なに、お前達のせいじゃない！！！！」

「そうですね、私達のせいではないですね」

そういった私にタズナさんが驚いた表情を浮かべて私をみる。

カカシ先生とその他も、私をみていた。

「私達は悪くないですよ？ここでやめても。タズナさんが嘘をいれたのが悪いんですし」

タズナさんがちょっと青ざめたような感じで此方をみていた

「任務外なんだからやめましょうよ。先生。この嘘も火影様に報告しなくてはなりませんし」

そういうと、カカシ先生は難しそうな表情を浮かべた。

「それに、こんな任務しているんだったら、修行でもしていたほうがマシですよ？」

「しかもその１０歳のお孫さんが木の葉をうらむ？タズナさんが悪いのに私達を恨むんですか？」

「私達は悪くない。あ、１０歳だから理解能力がたりないんですね」

「カカシ先生。私はこの任務から抜けて帰ってもいいですか？」

カカシ先生に聞いた。

すると。カカシ先生が答える前に、タズナさんが土下座した。

タズナ「すまない・・・このとおりじゃ！任務を続行してくれ！！」

そういったから、私はニッコリと笑って。

「最初からそうすればいいんですよ」

といった。

カカシ先生たちは（意外とアリスってドＳなのか・・・？）っておもっていた。

サクラ「ま、まあ、これでアリスもいいわけだし・・・任務続行しましょうよ？」

サクラさんが空気を変えるために、カカシ先生に言う。

カカシ「ま、そうだな・・・とりあえず、任務続行で、護衛を続けようか」

「そうですね。こんな任務さっさと終わらせて修行がしたいですから」

といって、また出発した。

１０話　波の国護衛任務　３。（後書き）

中途半端でおわってすみません。

１０話でしたー。

１１話　波の国護衛任務　４。（前書き）

最近ハワイ旅行の準備で更新ができにくくなっています・・・

はい、１日更新できなかった言い訳です。すみません・・・。

それと、週間アクセス１７３３です！ありがとうございます！

１１話です。

１１話　波の国護衛任務　４。

タズナ「ほらほら！さっさとこげい！」

ただ今深い霧の中を小船でこいでいます。

というかタズナさんいきなり立ち直りましたね・・・。

全く反省していないとういうことですよね。

ちょっと腹が立ちました。今すぐ半殺しにして「しちゃだめだぞ、アリス」

「カカシ先生、心読まないでください」

カカシ「いやいや、その顔みてると大体わかるから」

「ちっ」

カカシ「舌打ちって・・・まあいいか・・・」

タズナ「ほらほら！！さっさとこげい！餓鬼ども！」

・・・うざいですねやっぱり今すぐここで半殺しじゃなく瀕死に「だから駄目だって」

仕方ないですね・・・任務が終わった後に溺死にしましょうか。

それにしても顔を見て、考えることが分かるというのですか・・・

しかたないですね、ニコニコとずっと笑っていることにします。

コキイッ　コキイッ

ずっと船をこいでいる音が出てくる。

というか、なんでサクラさんはこいでいないんですか・・・

きいたら「だって私女の子だから、こういうのは男子がやるものでしょ？」

でした。私は女子ではないんですか・・・。

しかも、私だけ２つリールを持たなくてはいけないとか・・・

これは差別です！訴えます！

まあ、そこら辺はどうでもいいですけどね。

あ、もうすぐ岸につきますね。

――――――アリス移動中――――――

とりあえず岸についた私達。

タズナさんのうざさに疲れました。

そのまましばらく5分間歩いていると、

ナルト「そこかあ！！！！」

するといきなりナルトさんが手裏剣をいきなり気配も何もない所になげた。

サクラ「ナルト！！なにやってるのよ！！」

ナルト「フッ・・・ただの蛇か・・・」

・・・そこには気配もなにもありませんでしたけど・・・・？

するといきなり三時の方向から気配を察知した。

カカシ先生も気づいたらしく横目で見ていた。

ナルト「！！そこだあ！！！！」

我武者羅になげた手裏剣がその気配のあった方向に飛んでいった。

サクラ「もうさっきから何やっているのよ！！」
ナルト「本当にそこの方向から気配があったんだってばよ！」
そういう会話をしているのをほっといて、
私は手裏剣の投げたほうに向かう。
すると、そこにいたのは”白い”毛並みの兎だった。
その兎を持ってきたアリスを見て、ナルトは顔が少し青ざめた
カカシ先生は何かを考えていた。
サクラ「兎じゃないの！！かわいそうじゃない！なにするのよ！」
ナルト「ほ、本当に気配があったんだってばよ！でも兎がいるなんてわからなかったんだってばよ！！」
とりあえず、可愛いので抱えておいた。
すると３００？先に何かが飛んできていた。
カカシ「！！皆！！伏せろ！」
すると皆伏せた上に、頭上に刃物が通っていった。
とりあえずリュックの中に兎を入れておく。
ザクッ！という音がなった後、ストッという音がした。

そこを見ると、木に刺さった刃物の上に、バンダナとマスクをしている男の人が立っていた。

カカシ先生は何かに気づいたようで、ゆっくりと立ち上がった。

カカシ「これはこれは・・・霧隠れの抜け忍、『桃地再不斬』さんじゃないですか・・・」

再不斬「・・・写輪眼のカカシと見受ける・・・悪いが、そこのジジイの命、渡してもらおうか・・・」

二人が殺気をぶつけ合っている。

アリス以外のナルト、サクラ、サスケは殺気に震えていた。

アリスは、これ以上の殺気に普通に当たっていたので全く震えていない。

カカシ「・・・こいつ等は、さっきのやつらと桁が違う・・・お前らは、”卍の陣”でタズナさんを守れ！」

そういいながら、いつも右目を覆っている額当てを上に上げる。

あげ終わったあとに、見るとそこには勾玉模様が三つある赤い目が現れた。

カカシ「まずは、俺と戦え・・・・」

（右目だけ写輪眼っていうのはあまりかっこよくないですね・・・）

と、アリスはすこしズレたことを考えていた。

再不斬「ほう・・・噂に聞く写輪眼が見られるとは・・・厄介だな」

再不斬は、写輪眼のことを知っているらしく、厄介といっていた。

ナルト「ああ！もう！さっきから言ってるシャリンガンシャリンガンってなんなんだってばよ！！！」

「ちょっと五月蝿いです。音量を下げてください」

ナルトさんが言ったことに対して文句をいうアリス。

「つまりですね、あれは瞳術なんですよ」

ナルトさんに説明を始めるアリス。

「この世界には、複数の瞳術があります。それぞれの個々の特徴、能力をもっているのです。そして、その瞳についている洞察力は、幻術、体術、忍術を跳ね返したり、見破ったりできるんですよ。で、その写輪眼も一つです。」

ナルトさんは、あまりよくわからないといった感じですね。

「でも、その瞳術は、誰でもつかえるというわけではありません。写輪眼は、実はうちは一族にしかつかえないんです」

ナルト「それじゃあ、アリスやサスケは使えるんだ」

「いえ、その瞳術は、開眼しないと使えないんです」

そして、ニヤッと笑う

「これが、写輪眼ですよ」

といい、写輪眼を使う。

いきなり目が変わったことに皆驚いていた。

カカシ「アリスは写輪眼がつかえたのか・・・」

「はい、そうですよ？」

サスケさんは、うちは一族でアリスが使えるのに、自分が使えないことに悔しがっていた。

再不斬「！！ほう・・・お前の班には写輪眼が使えるやつがいたんだな・・・」

再不斬は、アリスが写輪眼を使えることに驚いていたが、白の相手が出来そうだと思っていた。

再不斬「まあ、そんなことはどうでもいい・・・早くそこのジジイを殺らなきゃいけないからな」

そういった瞬間に皆の表情が変わり、カカシ先生は再不斬、他の人はタズナさんを守るための護衛に入った。

再不斬「といっても、まあ・・・そのためには、カカシ！お前を先に殺らなきゃいけねえみたいだけどなあ！！」

と、いいながら再不斬は、カカシに切り掛かった。

１１話　波の国護衛任務　４。（後書き）

中途半端に終わりました・・・

駄文ですみません・・・。

次回、戦闘シーン入ります。

１１話でした。

１２話　波の国護衛任務　５。（前書き）

１２話ですー。

12話　波の国護衛任務　5。

再不斬「忍法・・・『霧隠れの術』」

そういった瞬間にあたりに霧でてきて、再不斬の姿は全く見えなくなった。

カカシ「桃地再不斬・・・・・・コイツは霧隠れの暗部で『無音殺人術(サイレントキリング)』のと呼ばれていた男だ、少しでも油断すれば気づいたらあの世・・・なんてことになりかねない。俺も写輪眼を全て上手く使いこなせるわけじゃないからな・・・皆！気を抜くな！！」

「（ふむふむ・・・再不斬の強さを拝見と言うことですね・・・）」

アリスは違うことを考えながら、再不斬の強さについて考えていた。

「（もしかしたら私の計画に使うことが出来るかもしませんね・・・）」

するといきなり殺気が強くなった。

カカシ先生とアリスは平気そうだけど、他の皆はあまり平気じゃないそうだ。

特に、なぜかサスケさんが酷かった。

目が大きく開いていて、震えていてうごけなかったようだ。

ナルトさんは同じ感じだけど、サスケさんほど酷くはなかった。

サクラさんは、震えてはいるけど、少しは動けるようだ。

「（サクラさんには殺気の耐性が少しだけはあるんですね、ですが一番のルーキーとか言われているサスケさんが一番酷いってどういうことですか・・・）」

アリスは少し考えた。

「（もしかして、殺気でイタチさんが行ったうちは一族の虐殺の記憶がフラッシュバックするんでしょうか・・？）」

などと考えていたときに、霧の中か低い声がした。

再不斬「八箇所だ」

霧の中にいるということから再不斬の声だと分かる。

再不斬「咽頭、脊柱、頚動脈に鎖骨下動脈、腎臓に心臓・・・さて・・・どの急所がいい・・・？クククッ」

そういうと、さらに殺気が強くなり震えが大きくなる。

カカシ「安心しろ」

カカシ先生の声が聞こえて少し震えが収まったようだ。

カカシ「俺の仲間は絶対に殺させはしないさ」

すると、殺気が消えたように震えがとまる。

再不斬「その言葉はいつまで続くかな・・・？」

すると再不斬が一気にカカシ先生の前まで縮まる。

そして、再不斬のもっている大きい刃物で切りつけた。

だが、きりつけた瞬間に水になって消えた。

再不斬「なるほど・・・水分身をもうすでにコピーしたということか・・・」

そして、再不斬の首の横にチャキッと、音を立ててクナイが置かれた。

カカシ「終わりだ」

サクラ「カカシ先生！！」

嬉しそうにサクラさんがカカシ先生と呼ぶ。

だが、

再不斬「残念だったな・・・俺もそう甘かあねえんだよ！！！」

といった瞬間に再不斬の体が水になって消えた。

すると、後ろから気配が感じた。

咄嗟にしゃがむと、頭上に刃物が通っていった。

再不斬「チッ」

再不斬は、短く舌打ちすると回し蹴りを放った。

変な体制でしゃがんだからか、再不斬の蹴りに反応できずそのまま湖の方向へ吹き飛ばされていった。

ナルト「カカシ先生え！！」

ナルトさんが叫んだ瞬間に、再不斬は水になって消えて、湖のほうに出てきた。

再不斬「水牢の術！」

そして・・・カカシ先生を水牢の術で水の中に閉じ込めた。

「（原作どおりで大丈夫ですね・・・さて、そろそろ動きますか）」

ポーチをあさって、カカシ先生と戦ったときと同じ爪をだす。

カカシ「（まずい！！このままでは・・・）お前ら！！タズナさんを連れて逃げろ！！」

そういった瞬間に、写輪眼を閉じて、普通の目にした後超能力、ベクトル操作でいっきに再不斬に攻め寄る。

カカシ「な！アリス！逃げろっていっただろ！」

「いやですよ・・・せっかく戦えるのに・・何故逃げなきゃいけな

いんですか？」

再不斬が水分身を出してくると、つけていた爪で引き裂く。

そして一気に再不斬に近づくと、その爪を振り下ろす。

だけど、大きな刃物でさえぎられる。

だが、マカの能力をつかって髪を剣にする。

いきなりキンッと、音がした髪に再不斬は驚いた。

そして、その髪をいっきに水牢を維持するために使っている右手に振り下ろす。

再不斬は手を抜いて、アリスから距離をとる。

カカシ「アリス・・・よくやった」

「カカシ先生。私、再不斬と戦いたいのでちょっと端で待っててください」

サクラ「危険よ！！早くもどってきなさいよ！」

「大丈夫です。ちょっと戦ってくるだけですから」

サクラ「それが危険だっていってるのよ！」

「大丈夫ですよ。生きて帰ってきますから」

カカシ「仕方がない・・・無理はするなよ」

やりました！許可もらいました！

再不斬相手では、大体全力の１割くらいで大丈夫ですね。

とりあえず戦いましょうか。

再不斬「クククククッ・・・俺と戦いたいねえ・・・なめるなよ餓鬼！！」

そう言ってこっちに走ってきました。

やっぱり反射はずるいので、使わないでおきましょうか。

こっちも間を詰めて、爪を使って攻撃をする。

再不斬も、こっちにきて大きい刃物を振り下ろす。

カキンッ！ギギギッ！っと、音を立てて刃物がぶつかり合う。

だけど、髪を使って前４方向から攻撃します。

再不斬は、一気に刃物を上に上げて攻撃をよけると、後ろへ宙返りしてたった後、水分身を出してきました。

そのまま私は突っ込んでいって、水分身をよけると、風使い《エアロマスター》で、宙にあげて下に叩きつけ、水に戻す。

そして、相手も突っ込んできたので、また爪と刃物がぶつかり合い

ます。

そこで、電撃使い《エレクトロマスター》で、再不斬の武器をひきつけた後、背負い投げで一気に投げて、地面に叩きつけます。

その跡に、風使い《エアロマスター》の風力を最大値に上げたやつで、上空に上げたあと、思いっきり地面に叩きつけた。

そしたら、いきなり千本が再不斬の首に刺さっていった。

すると、霧がくれの追い忍と思われる忍者が立っていた。

??「有難うございます・・・ようやく再不斬を殺すことができました・・・」

すると、カカシ先生が走ってきて、手の脈のあるところに手を当てる。

脈は動いていなかった。

カカシ「（本当に死んだな・・・・・）追い忍か」

??「はい・・・よく知っていらっしゃる」

カカシ先生は、若いのにもう追い忍か・・・とおもっていた。

??「僕はこの死体を処理しなくてはなりません・・・・・何かと、秘密が多い死体なので・・・・・・それでは、失礼します。」

そういうと、再不斬の死体を担いでどこかに去っていった。

「ひとまずは、これで大丈夫・・・ということですね」

カカシ「そうだな・・・まずは、タズナさんの家にいくぞ」

といった瞬間に、アリスがフラッと倒れた。

サクラ「！アリスッ」

「ちょっと張り切りすぎちゃったかもしれませんね・・・」

そして、カカシ先生が寄ってきた。

カカシ「・・・疲れたんだろう。今は気絶しているだけだ」

ちなみにアリスは起きている。

こんなもんで、気絶するほどチャクラは少なくない。

これは気絶したふりをしていた。

カカシ「アリスは俺が背負っていくから、とりあえず進むぞ」

そして、そのまま皆は進んでいった。

１２話　波の国護衛任務　５。（後書き）

ミク「何でアリスが戦闘狂（バトルジャンキー）みたいになっているんだ・・・しかも戦闘描写とかうまく出来てないし・・・もうやだ鬱だ死のう鬱だ死の

う鬱だ死のう・・・（ｒｙ」

アリス「すみません。今ミクさんが凹んでいるので私が言います」

アリス「感想やアトバイス、誤字脱字などの報告お願いします。それと、駄文ですみませんでした。１２話です。いつも読んでいただいて有難うございます！」

１３話　波の国護衛任務　６。（前書き）

１３話目ですー。

１３話　波の国護衛任務　６。

こんにちは、アリスです。

ただ今カカシ先生に背負ってもらっています。

ここで原作と違うのは、カカシ先生が倒れていないところですね。

おそらく最初のほうしか戦っていないからでしょうか。

水牢につかまった後から私が動きましたからね・・・。

おそらくそのときでしょう。

サクラ「そういえば・・・アリスが水分身を抜けた後に突風が出てきたよね・・・あれってアリスがやったの？カカシ先生」

おや、私のことについて聞いてますね。

カカシ「おそらくそうだろうな・・・だが、あのような術は存在しないんだ」

サクラ「それじゃあ新術なの！？」

カカシ「いや・・・アリスは”印を結んでいなかった”・・・だから違うだろう・・・」

私の超能力、風使い《エアロマスター》について聞いてますね。

サクラ「印を結んでいなかったの!?なんで!?術は印を結ばないと出来ないはず・・・」

カカシ「俺にもわからないんだ・・・知りたいなら、アリスに聞いてみれば分かるだろう・・・」

サスケ「チッ・・・」

サスケさんは私が再不斬を倒したことが気に食わないみたいですね・・・。

そう思うなら再不斬を倒してみればいいじゃないですか?っていう話なんですけどね。

・・・まあ無理でしょうが・・・

自惚れではないんですが、暁の中で一番強いと思います、自分。

ナルト「そういえばさ、再不斬の死体持ってったカカシ先生の言っていた、追い忍ってなんだってばよ?」

カカシ「ああ、あれか。追い忍、通称”死体処理班”。たとえば俺が死んだ場合、俺が持っている写輪眼の性質、特徴などがすべて調べ上げられてしまい、敵に術ごと奪い取られる危険性があるわけだ」

サクラ「へえ・・・」

カカシ「つまり追い忍は、里の秘密が漏れるのを防ぐ、スペシャリストというわけだ」

ナルト「（な、なんかよくわかんねえけど、あの再不斬もどうにかされちゃうってことなのかあ？？）」

ナルトさんはあまり分かっていませんね。

それから何事もなく、波の国につくことが出来てタズナさんの家につくことが出来ました。

そのままベットに寝かされて皆が出て行った後、超能力透視をつかって他の皆がいる部屋を見る。

そしてなにか色々話している様子だった。

読唇術で、なんてしゃべっているのかを聞いてみる。

サクラ「・・・・に呼び出してなんですか？カカシ先生」

カカシ「ん、ああ。普通死体処理班っていうのはな、死体をその場で処理するんだ」

サスケ「・・・!!まさか・・・」

カカシ「そうだ、そのまさかだ」

サクラ「全くわからないわよ!」

カカシ「あの追い忍は死体をどうした??」

サクラ「!?それって・・・」

ナルト「なあーーーー!もう!ぜんっぜんわかないってばよ!!!」

カカシ「はあ・・・おそらく再不斬は生きている」

ナルト「なんでってばよ!あの追い忍は首に針刺したんだってばよ!生きてるはずないってばよ!」

カカシ「あの追い忍が使った武器は千本といって、急所にでも当たらないと殺傷能力が低い武器だ。ツボなどの治療に使われる物でもある、首にある動脈には仮死状態にする所というのもある。この2点から考えられると言うのは・・・おそらくあの追い忍は再不斬を殺しにきたのではなくて、”助けに来た”ということもある」

タズナ「・・・超考えすぎではないのか?」

んー、大体ここら辺でいいでしょう。

透視をといて、布団からゆっくりでる。

そのまま布団を綺麗に伸ばしてから、部屋を出る。

カカシ先生達がいるのは隣の部屋だから、とりあえずリビングにでる。

すると、台所からトントントントントントンッと、何かを切る音が聞こえてきた。

イナリさんの母だな・・・と思いながらそのまま元の部屋の前まで戻る。

そして、隣の部屋の扉を開ける。

カカシ「お、アリス、起きたのか・・・いま再不斬の事で言っていたんだが・・・」

「はい、再不斬は生きているということですよね」

カカシ「ん、もう知っていたのか」

「追い忍が死体をそのまま持って帰ることは普通ないですから」

カカシ「そういえば怪我とかはどうした？」

「え、ああ、無傷ですよ？」

カカシ&サスケ「！？」

サクラ「無傷って・・・本当に！？」

ナルト「すげえーってばよ！！」

「私が倒れたのは疲労ですから・・・」

カカシ「（下手したら俺より強いぞ・・・）」

カカシ先生は俺より強いんじゃないか・・・？とおもっていた。

正直言ってカカシ先生と戦ったら９：１で勝つだろう。

残りの１は、カカシ先生と戦ったときにその超能力が見破られたり、実戦経験の差でカカシ先生がかつかもしれないということ。

まあはっきりいって９：１じゃなくて９，９：０．１くらいなんだけども・・・。

カカシ「ま、再不斬はすぐには襲って来ないだろう」

ナルト「なんでだってばよ？」

「仮死状態になった場合、体が動けるようになるには一週間くらいかかるからです、そのため、すぐには襲ってこないでしょう。」

カカシ「ま、俺も写輪眼すこし使ったから２日くらいは動きにくいだろう、そこで、お前達に修行をプレゼントしてやる」

――――――――アリス移動中――――――――

林の入り口にやってきた。

カカシ「というわけで、木登りしてもらう」

ナルト「なんで木登りなんだってばよ！そんなの簡単にできるってばよ！」

カカシ「まあ、手を使わないで登るんだぞ」

サクラ「え？どうするのよ」

カカシ「こうするんだ」

そういったら、印をしてからゆっくり木を登っていった。

木にたっていると言う状態。といっても木の壁にだが、

サクラ「手を使わないで木を登ってる・・・」

カカシ「と、まあこれをしてもらう、これをするとチャクラコントロールと、スタミナの上昇するから」

ま、体でなれるしかないけどな、というカカシ先生。

カカシ「のぼって、落ちそうなときにクナイで傷をつけて目印にしろ、一番上まで登れたら次の修行だから」

ナルト「よおーーーし、やるってばよ!!」

とおりゃあああああっ!!っていいながら登るナルトさん、だが3歩くらいで落ちる。

サスケさんは、5歩くらいのぼったときにチャクラの量が多すぎてはじかれてしまった。

サクラさんは原作どおり一番で登っていった。

カカシ「ん?アリスはできるのか?」

「え・・・これって今やるんですか?」

ナルト「どうゆうことだってばよ」

「私これ三歳児のときにやってましたが・・・」

・・・・・・皆が沈黙した。

「え、何かまずいことでもいいました??」

なにかやばいことでもいったかとオロオロするふりをするアリス。

カカシ「ま、まあアリスもできるんだろ?登ってみてくれ」

「はい、わかりました」

そのまま歩いて登っていくアリス。

カカシ「ま、一番チャクラコントロールがうまいのは女子なのね、一番ルーキーのうちは一族はあまりたいしたことないのね、それに、これくらいできなければ火影なんて夢のまた夢だよ」

挑発するようにいうカカシ先生。

その言葉でいらついたようでやってやるーー!!!といいながらどんどん登っていく2人。

といっても6歩くらいで落ちてますが、

あ、ナルトさんがサクラさんにコツを聞きに行きました。

ってあれ?サスケさんが近づいてきてる?

サスケ「アリス、・・・・コ、コツを教えてくれないか?」

ここは原作ではナルトにきいて、教えないと言われるんでしたよね・・・。

ま、いいです。教えましょう。

「こういうのは集中とイメージが大切なんです」

そういうとふむふむと言う感じで頷く。

「一定の量を集めないといけないので、集中が必要ですし集中が切れたらそこで落ちてしまうので、木と足がくっついて登れるようなイメージをしながら行けばいいんです」

なるほど・・・と言う感じで聞いてますね。

「たとえるなら磁石ですよ、N極とS極が合わさるような感じで」

サスケ「なるほど・・・参考になった、ありがとう」

・・・サスケさんがありがとうっていった！

初めて聞きました・・・。

そしてそのまま歩いていって、登っていきました。

あ、9歩までいきました。

3歩あがりましたねえ・・・たったあれだけのアトバイスで。

やっぱりサスケさんには才能があったんですね。

さて、私はタズナさんの家にもどりますか。

１３話　波の国護衛任務　６。（後書き）

１３話でした・・・。

感想やアトバイス、案や誤字脱字の報告お願いします・・・。

駄文ですみませんでした・・・。

鬱だ死のう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7533z/

NARUTO転生モノ。

2012年1月6日14時48分発行